

ごんぎつね

新美 南吉
にい み なん きち

一

これは、わたしが小さいときに、村の茂平もへいというおじいさんから聞いたお話です。

昔は、わたしたちの村の近くの、中山なかやまという所に小さなお城しろがあつて、中山様とというお殿様が、おられたそうです。

その中山から、少しはなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっばいしげった森の中に穴あなをほって住んでいました。そして、夜でも昼でも、辺り

の村へ出てきて、いたずらばかりしました。畑へ入つていもをほり散らしたり、菜種なねがらの、干ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家ひやくしやうやの裏手うらてにつるしてあるとんがらしをむしり取つていったり、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて穴あなの中にしゃがんでいました。

雨が上がると、ごんは、ほつとして穴からはい出ました。空はからつと晴れていて、もずの音がキンキン、ひびいていました。

ごんは、村の小川の堤つみまで出てきました。辺りの、すすきの穂ほには、まだ雨のしずくが光っていました。川はいつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水が、どつとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、はぎの株かぶが、黄色くにごつた水に横よこだおしになつて、もまれていきます。ご

んは川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。
ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。
ごんは、見つからないように、そうつと草の深い所へ
歩きよって、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十ひょうじゅうだな。」と、ごんは思いました。兵十はぼろ
ぼろの黒い着物をまくし上げて、腰こしの所まで水にひた
りながら、魚をとる、はりきりという、網あみをゆすぶっ
ていました。はちまきをした顔の横つちように、円い
はぎの葉が一まい、大きな黒子ほくろみたいにへばり付いて
いました。

しばらくすると、兵十は、はりきり、あみのいちばん
後ろの、袋ふくろのようになったところを、水の中から持
ち上げました。その中には、しばの根や、草の葉や、
くさった木切れなどが、ごちやごちや入っていました
が、でもところどころ、白い物がきらきら光っていま
す。それは、太いうなぎの腹はらや、大きなきすの腹でし
た。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみ

といっしよにぶちこみました。そしてまた、袋の口を
しばって、水の中へ入れました。

兵十はそれから、びくを持って川から上がり、びく
を土手に置いといて、何をさがしにか、川上の方へか
けていきました。

兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中から
飛び出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、
いたずらがしたくなったのです。ごんは、びくの中の
魚をつかみ出しては、はりきり、あみのかかっている所
より下手の川の中を目がけて、ぽんぽん投げこみまし
た。どの魚も、「トボン」と音を立てながら、にごっ
た水の中へもぐりこみました。

いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりま
したが、なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手で
はつかめません。ごんはじれったくなつて、頭をびく
の中につっこんで、うなぎの頭を口にくわえました。
うなぎは、キュツといつて、ごんの首へまき付きまし

た。そのとたんに兵十が、向こうから、

「うわあ、ぬすとぎつねめ。」

と、どなりたてました。ごんは、びっくりして飛び上がりました。うなぎをふりすててにげようと思いました。が、うなぎは、ごんの首にまき付いたままはなれませんでした。ごんはそのまま横っ飛びに飛び出して一生けんめいに、にげていきました。

洞穴ほらあなの近くの、はんの木の下でふり返ってみましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっと外して、穴の外の草の葉の上のせておきました。

二

十日ほどたって、ごんが、弥助やすけというお百姓のうちうちの裏を通りかかりますと、そこの、いちじくいちじくの木の

げで、弥助の家内が、お歯黒を付けていました。かじ屋かじの新兵衛しんべえのうちの裏を通ると、新兵衛の家内が、髪かみをすいていました。ごんは、「ふふん、村に何かあるんだな。」と思いました。「なんだろう、秋祭りかな。祭りなら、たいこや笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮みやにのぼりが立つはずだが。」

こんなことを考えながらやってきますと、いつの間にか、表に赤い井戸いどのある、兵十のうちの前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢の人が集まっていました。よそ行きの着物を着て、腰に手ぬぐいてぬぐいを下げたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きななべの中では、何かぐずぐずにえています。

「ああ、葬式そうしきだ。」と、ごんは思いました。「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

お昼ひるがすぎると、ごんは、村の墓地ぼちへ行つて、六地藏むつじざうさんのかげにかくれていました。いいお天気で、遠

く向こうにはお城の屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いています。と、村の方から、カーン、カーンとかねが鳴ってきました。葬式の出る合図です。

やがて、白い着物を着た葬列の者たちがやってくるのがちらちら見え始めました。話し声も近くなりました。葬列は墓地へ入ってきました。人々を通ったあとには、ひがん花が、ふみ折られていました。

ごんはのび上がって見ました。兵十が、白いかみしもを着けて、位はいをささげています。いつもは赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていました。

「ははん、死んだのは兵十のおつかあだ。」ごんはそう思いながら、頭を引っこめました。

その晩、ごんは、穴の中で考えました。「兵十のおつかあは、床についていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで、兵十が、はりきり、あみを持

ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取ってきてしまった。だから兵十は、おつかあにうなぎを食べさせることができなかった。そのままおつかあは、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いつながら、死んだらう。ちよつ、あんないたずらをしなけりやよかった。」

三

兵十が、赤い井戸の所で、麦をといでいました。

兵十は今まで、おつかあと二人きりで貧しい暮らしをしてきたもので、おつかあが死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。「おれと同じひとりぼっちの兵十か。」こちらの物置の後ろから見ているごんは、そう思いました。

ごんは物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしの安売りだあい。生きのいい、いわしだあい。」

ごんは、その、いせいのいい声のする方へ走っていききました。と、弥助のおかみさんが裏戸口から、

「いわしをおくれ。」

と言いました。いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を、道ばたに置いて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持って入りました。ごんはそのすき間に、かごの中から、五、六ぴきのいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました。そして、兵十のうちの裏口から、うちの中へいわしを投げこんで、穴へ向かってかけもどりました。とちゅうの坂の上でふり返ってみますと、兵十がまだ、井戸の所で麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいこと

をしたと思いました。

次の日には、ごんは山で栗くりをどつきり拾って、それをかかえて、兵十のうちへ行きました。

裏口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯を食べかけて、茶わんを持ったまま、ぼんやりと考えこんでいました。変なことには兵十のほっぺたに、かすり傷きずが付いています。どうしたんだらうと、ごんが思っていますと、兵十がひとり言を言いました。

「いったい、だれが、いわしなんかを、おれのうちへほうりこんでいったんだらう。おかげでおれは、盗人ぬすびとと思われる、いわし屋のやつに、ひどい目にあわされた。」

と、ぶつぶつ言っています。

ごんは、これはしまったと思いました。「かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんな傷まで付けられたのか。」

ごんはこう思いながら、そつと物置の方へ回ってそ

の入口に、栗を置いて帰りました。

次の日も、その次の日もごんは、栗を拾っては、兵十のうちへ持ってきてやりました。その次の日には、栗ばかりでなく、松たけも二、三本、持っていきました。

四

月のいい晩でした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山様のお城の下を通って少し行くと、細い道の向こうから、だれか来るようです。話し声が聞こえます。チンチロリン、チンチロリンと松虫が鳴いています。

ごんは、道の片側かたがわにかくれて、じっとしていました。話し声はだんだん近くなりました。それは、兵十と、

加助かすけというお百姓でした。

「そうそう、なあ加助。」
と、兵十が言いました。

「ああん。」

「おれあ、このごろ、とても、不思議なことがあるんだ。」

「何が。」

「おつかあが死んでからは、だれだか知らんが、おれに栗や松たけなんかを、毎日毎日くれるんだよ。」

「ふうん、だれが。」

「それが分からのだよ。おれの知らんうちに、置いていくんだ。」

ごんは、二人の後をつけていきました。

「ほんとかい。」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした見に来いよ。その栗を見せてやるよ。」

「へえ、変なこともあるもんだなあ。」

それなり、二人はだまって歩いていきました。

加助がひよいと後ろを見ました。ごんはびくつとして、小さくなつて立ち止まりました。加助は、ごんには気がつかないで、そのままさつきと歩きました。吉兵衛べえというお百姓のうちまで来ると、二人はそこへ入つていきました。ポンポンポンと木魚の音がしています。窓の障子まどに明かりが差していて、大きなぼうず頭がうつつて動いていました。ごんは、「お念仏があるんだな。」と思ひながら井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど、人が連れ立って吉兵衛のうちへ入つていきました。お経きやうを読む声こゑが聞こえてきました。

五

ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがん

でいました。兵十と加助は、またいつしよに帰つていきます。ごんは、二人の話を聞こうと思つて、ついていきました。兵十の影法師かげぼうしをふみふみ行きました。

お城の前まで来たとき、加助が言いだしました。

「さっきの話は、きつと、そりゃあ、神様のしわざだぞ。」

「えつ。」

と、兵十はびくくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神様だ、神様が、お前がたった一人になつたのをあわれに思わっしゃつて、いろんな物をめぐんでくださるんだよ。」

「そうかなあ。」

「そうだとも。だから、毎日神様にお礼を言うがいいよ。」

「うん。」

ごんは、へえ、こいつはつまらないな。と思ひまし

た。おれが栗や松たけを持って行ってやるのに、そのおれにはお札を言わないで、神様にお札を言うんじやあ、おれは、引き合わないなあ。

六

その明くる日もごんは、栗を持って、兵十のうちへ出かけました。兵十は、物置で縄をなっていました。それでごんはうちの裏口から、こっそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔を上げました。と、きつねがうちの中へ入ったではありませんか。こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。

「ようし。」

兵十は、立ち上がって、納屋なやにかけてある火縄銃ひなわじゆうを

取って、火薬をつめました。そして足音をしのばせて近寄ちかよって、今戸口を出ようとするごんを、ドンと、うちました。

ごんは、バタリとたおれました。

兵十はかけよってきました。うちの中を見ると土間に栗が、固めて置いてあるのが目につきました。

「おや。」と兵十は、びっくりしてごんに目を落としました。

「ごん、お前まだったのか。いつも栗をくれたのは。」
ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

兵十は、火縄銃をバタリと、取り落としました。青いけむりが、まだ筒口つつぐちから細く出ていました。

「ごんぎつね」

※『赤い鳥』版（鈴木三重吉主宰、1931年1月号）の「ごん狐」をもとに現代仮名遣いで表記しました。漢字については小学4年生までの学習漢字を基本とし、学習していない漢字には初出にルビをうちました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。（TEL：0569-26-4888）